

2020.06.21

【ダビデの場合】

4:4 ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。

4:5 しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。

4:6 同じようにダビデも、行いによらずに神から義と認められた人の幸いを、次のようにたたえています。

4:7 「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。

4:8 主から罪があると見なされない人は、幸いである。」

+++

パウロは前の章で

3:23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、3:24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

と書きました。

「キリストイエスの贖い」「神の恵み」「無償」で提供されている救いを御子イエス・キリストが届けてくださったのだ。

そのイエス・キリストへご自身への信頼、そのお方の救いの言葉と救いのための出来事を信頼することにより救い、つまり神との正常な交流はもたらされるのだというのです。

そして、その実例としてパウロはまずアブラハムをあげ、次に「ダビデ」の言葉を例に出して話を進めています。

1) 恵みは労働への対価ではない

働いたことへの報酬は当然受け取るべきものであり、それは厳密には対価であり、受け取る資格のないものに提供されている善意、すなわち「恵み」ではありません。

救いは決して「私たちの善行や修養の対価」ではありません。パウロはことさらにそのことを強調しています。

おそらくユダヤ教とであったパウロにとって一番大きな「祝福」をそこに見出したのだと思います。

これだけ奉仕をしたのだから、これだけ献金をしたのだから、神は私に報いてくれて良いはずだと感じることは自然なことだと思います。

そう、きっと報いてくださると思います。でも、「救い」ということになるとそうならないのです。

「救い」は「がんばり」の対価ではないからです。頑張っても、救いに到達することはできないし、神の側で提示した方法以外、私たちにはとるべき術がありません。

「恵みによる救い」それはどんな人にも提供されている救いです。人種や性別、年齢も分け隔てなく、提供されている神の偉大な善意のひとつとして「救い」の道が提示され、イエス様が遣わされたのです。

鍵となるのは自分の努力や頑張りではなく、イエス・キリストときちんと向き合えるかどうか、信頼の心を向けてしっかりまっすぐ立つことができるかどうかです。これまた、頑張りではなく聖霊はそういう力を与え、御言葉がそれをさせる動機付けを与えてくれます。

4:5 しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。

この言葉を信じられますか。「ありがたいなあ」と受け取れますか。

「自分は悪すぎるので、そんな簡単に救われれないと思う」と感じますか？「そんなことでは、滅びる人がいなくなってしまうのではないか」と感じますか。

滅びる人がいなくなることほど、嬉しいことはありません。救いの恵みに気付いたら、それほど嬉しいことはありません。

2) ダビデ

「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。」

4:8 主から罪があると見なされない人は、幸いである。」

この言葉は詩編 32 からの引用です。

32:1 【ダビデの詩。マスキール。】いかに幸いなことでしよう背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

32:2 いかに幸いなことでしよう主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。

この詩を書いたダビデは多くの人たちから愛された王であり、まさにユダヤの歴史における英雄です。

サムエル記上 16 章からサムエル記下の終わりまで、びっしりダビデの人生の物語が描かれています。

若い時からの勇士であり、サウロ王には妬まれ命を狙われますが、30歳で王になり40年間国を統治します。

戦いに勝利し、物事がうまく進んでいるように思える中で、彼は罪を犯しました。

決して完全無欠な人ではありませんでした。

サムエル記下 11 章、12 章にはダビデの罪の記録が生々しく描かれています。ぜひ、あとで読んでおいてください。

優秀な兵士ウリヤの妻「バト・シェバ」との姦淫。そして自分の罪を隠そうとして夫のウリヤを戦場から呼び寄せますが、まじめなウリヤは家に帰ろうとしないので、最前線に戻り、そこでわざと敵に殺されてしまうように仕組むのです。卑怯な仕打ちで自分の罪を隠そうと画策し、最悪な手段を用いました。

姦淫、謀略、殺人、それらの伏線には慢心、高慢がありました。

預言者ナタンがやってきて、彼を諫め、彼は自分の愚かさ、罪の深さに気付きます。

そして、ダビデは悔い改めるのです。有名な詩編 51 編は、その時の詩編だと言われています。

51:2 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】

51:3 神よ、わたしを憐れんでください御慈しみをもって。深い御憐れみをもって背きの罪をぬぐってください。

51:4 わたしの咎をことごとく洗い罪から清めてください。

51:5 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。

51:6 あなたに、あなたのみにもわたしは罪を犯し御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しくあなたの裁きに誤りはありません。

51:7 わたしは咎のうちに産み落とされ母がわたしを身ごもったときもわたしは罪のうちにあったのです。

51:8 あなたは秘儀ではなくまことを望み秘術を排して知恵を悟らせてくださいます。

51:9 ヒソプの枝でわたしの罪を払ってくださいわたしが清くなるように。わたしを洗ってください雪よりも白くなるように。

51:10 喜び祝う声を聞かせてくださいあなたによって碎かれたこの骨が喜び躍るように。

51:11 わたしの罪に御顔を向けず咎をことごとくぬぐってください。

51:12 神よ、わたしの内に清い心を創造し新しく確かな霊を授けてください。

51:13 御前からわたしを退けずあなたの聖なる霊を取り上げないでください。

51:14 御救いの喜びを再びわたしに味わわせ自由の霊によって支えてください。

アブラハムとダビデのふたりがここに並べて書き出されているということは、読者にとっては興味深いことだったと思います。

二人とも不敬虔で罪ある存在であり、救いのために行いによる功德を積むことはできず、救いを自分の手柄にはできないわけです。

「行ないによるのではなく、信仰のみによって義と認められる」というパウロの教えはアブラハムのみならずダビデの人生においても同様に真実だったということがわかるので大きな説得力をもつのです。

アブラハムもダビデも、救いという点について、自分を誇ることは一つもなく、行ないを誇ることはできないのです。

神の御前では、どんな偉大な人物も、不敬虔で罪深い人間であり、救いは「信仰のみによって」与えられ、救いの提供者である神ご自身を信じる信仰によってのみ救われることを認めるほかはないのです。

ですから、「自分の心の傲慢を完全にゼロにする救いの方法なのだ」ということがわかります。

パウロは「信仰によってのみ、神の恵みによってのみ義と認められる。神の前にまっすぐに立つことができるようになる」という教えを徹底的に追求しています。

宗教的な高慢さをこなごなに粉碎しています。

誰にでも開かれている「救い」がここにあるのです。

付け加えておきますが、地上における罪の刈り取りは自分でしなければならないというのは原則です。

神との関係においては「まっすぐ向き、心が爽やかな関係が成立」しました。

しかし、この後のダビデの人生は決して以前と同じような爽やかさはありません。どこかでその具体的に罪の刈り取りをしながら生きていくこととなります。ただ、神との関係が修復していることが大きな励みになり、助けとなって前向きに進むことができたのです。ダビデは自分の罪深さとそれによって蒔かれてしまった種の深刻さに悩みつつ生きることとなります。それでも「神様には赦されている」という確信をもって生きていることで人生を全うすることができました。

ハレルヤ